

書評 Review

原爆と広島大学「生死の火」学術編（復刻版）

佐藤裕哉¹

Research on Atomic Bomb Disaster at Hiroshima University: “The Fire of Life and Death” Academic Edition (Reprint)

Yuya SATO¹

広島大学原爆死没者慰霊行事委員会. 2012. 広島大学出版会, 広島. 314p. ISBN978-4-903068-23-7, 2100円(税別)

「歴史から学ばぬ者は歴史を繰り返す」(エドモンド・バーク)。不幸にして新たな放射線災害が発生した。2011年3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震(東日本大震災)により引き起こされた東京電力福島第一原子力発電所の事故は、国際原子力事象尺度(INES)で最高レベルの「レベル7(深刻な事故)」に位置づけられている。本書は、元々は1977年刊の広島大学の関係者のみに配られた非売品である。福島第一原子力発電所の事故をうけて2012年4月に復刻し市販されたものである。本書を通して、私たちは歴史に学ぶことができるだろうか。

本書は、1.自然科学の部, 2.人文科学の部, 3.原爆被災資料の問題をめぐって—広島大学と「被災資料センター」—, の3つに大きく分けられる。様々な分野の専門家の手になり、内容が多岐に渡るためすべてを詳細には取り上げることはできないが、印象に残った箇所を中心に紹介したい。

1.自然科学の部「第1章 理・工学関係」では、残留放射能測定調査、動物・植物の被害状況と放射線による遺伝(奇形)調査、(熱線による)岩石の剥離・溶融現象、建物被害と原爆ドームの保存工事について述べられている。結果のみならず、被爆後すぐの調査(1945年9月)の様子や当時の苦勞(人員や測定機器の手配など)が記されている。本章で印象深かったのが、「放射能のため数10年は生物が住めないだろうといわれた広島焼け野原に、最初に現われて広島復興の先駆者となったのは、他ならぬこれらの雑草であった。萌え出た草の緑をみて、当時灰燼の中で悲嘆にくれていた人達はどんなに勇気づけられたことである

う」(p.16)という文章と、1975年7月の陳列品模様替えの際に撤去されるまで、爆心地に近い地域で採集した雑草が原爆資料館に展示されていたというエピソードである。放射線の生物への影響を示すための展示というだけではなく、人々の希望を示す展示でもあったのではないだろうか。

「第2章 医学関係」は本書において最も分量が割かれ、内容も基礎から臨床に至るまで多岐にわたる。被爆影響の研究史、原爆放射能医学研究所(現、原爆放射線医科学研究所、以下、原医研)の設立、被災者救護活動、病理解剖による急性障害の調査、黒い雨や残留放射能調査(1976年)、初期(1945年9月~10月)の白血球調査、精神疾患、原爆白内障、女性の被爆と出産(被爆二世)、胎内被曝(小頭症)、白血病などの血液疾患、ケロイド、制ガン療法、各種ガン(甲状腺ガン、被爆児のガン=小児ガン、胃ガン、乳ガン、肺ガン、皮膚ガン、膀胱ガン、唾液腺腫瘍)、発ガンメカニズムの検討、ガンによる死亡率の疫学・統計学的検討、放射線の影響(中性子の影響、DNA損傷と修復など)、被爆者データベースの構築、原爆被災のシミュレーション、被爆者医療について述べられている。

なかでも、当時の広島市保健局長であった志水清による原医研設立に向けた陳情の話は興味深かった。研究所設置許可が出た際に「原爆放射能の医学的生物学的影响の学理の究明に加えて、その研究成果を速やかに被爆者に適応しようよう実際的应用が可能になるよう万全の努力を傾注すべきことが強く指示され」(p.60)たそうだが、これは、福島で様々な調査・研究が進められようとしている現時点においても同じこ

¹ 広島大学原爆放射線医科学研究所: Research Institute for Radiation Biology and Medicine, Hiroshima University

とが言えるのではないだろうか。また、広島原爆によるガンによる死亡率の検討 (pp.147-151) において、論者により様々な数字が出てきており必ずしも一致した結果が得られていない事に対して、「被爆者」の範囲をどのように規定して統計を作成するのかという基本的問題、発生頻度の絶対数、年齢構成など、数値の示す意味に十分に配慮する必要があると説明されている。同じようなことを福島に対する報道などを見ていて思う。数値の大小のみがクローズアップされすぎてはいないだろうか。

評者は原医研において被爆資料を管理する職務についているが、以下に引用する言葉は最近よく考えさせられることである。「これらのテーマ (= 被爆者に関する調査・研究、評者注) はその基礎 (原) 資料が入手可能であることが前提となる。現実には残念ながらその可能性は急速に後退しつつあるとみなければならない。つまり、被爆者にかかわる情報は今後被爆者のプライバシーと強くかかわりをもつからである。われわれが入手し、調査し、生み出していくあらゆる被爆者情報 (医学的、社会的) は所詮被爆者の医療・福祉に還元し得るという前提と確信の上に立ってはいるが、このことに関して研究者と被爆者間における十分なコンセンサスが必須である」(pp.248-249)。職務上、被爆資料を一般に公開したり、資料を用いた研究を公表することがある。それは、原爆災害の実相を伝えたいという気持ちからであり、賛同してくださる被爆者の方もいる。一方で、「当時のことを思い出したくないから (当時のことを思い出しやすいものは) 出さないで欲しい」と考えている方もいる。難しい問題ではあるが、情報や資料の公開に関してコンセンサス形成に向けた努力は必要だと思う。

2. 人文科学の部は、3章で構成される。「第1章 人文科学関係」は、教職員、学生による手記などの資料についての紹介である。主なものを詳しく紹介するというスタイルではなく、リストの形式に近い。ところで、広島大学および前身校の出身の作家については、阿川弘之や大野允子などの名前があげられてはいるが、作品については取り上げられていない。特に児童文学作家の大野は、多くの原爆に関する著作を記しているだけに残念である。

「第2章 社会科学関係」は、教職員による被爆調査の結果、市史や戦災史への関わり、平和・核廃絶運動についての論考が紹介されている。書籍のみならず新聞論考についても取り上げられ、特に歴史学者 (東洋史) の今堀誠二の積極的な活動が目をひく。この章も第1章と同様のスタイルで多くの著作が紹介され

ている。

「第3章 平和教育関係」では、教職員の手になる研究が紹介されている。『原爆の子』を中心にした長田新の平和教育論のほか、附属中学・高校での研究授業に触れている点が興味深い。そのカリキュラムのなかで原子力利用慎重論と積極論の双方を講じているが、これは現在においても重要ではないだろうか。2. 人文科学の部に共通して、教職員へのアンケートを行い、業績のリストを作成、網羅するように紹介されており、多くの人達が関わっていることは分かる。しかしながら、3章で20ページほどしかなく、物足りなさを感じる。主なものを取り上げて論じたり、被爆文学について取り上げるなどしても良かったのではないだろうか。

3. 原爆被災資料の問題をめぐって—広島大学と「被災資料センター」—では、原爆被災に関する資料の収集と整理・保存・活用を担う「原爆被災学術資料センター」(以下、センター) の設置に至る経緯が紹介されている。ここでは、単に組織の設立の話だけではなく、その背景にある被災資料収集活動、平和記念資料館や原爆障害調査委員会 (ABCC, 現、放射線影響研究所) との関わり、地元メディアとの関わりなどが描かれている。また、中国新聞の記事を通してだが、センター設置に対する市民の意識も記されており (平和記念資料館との重複の問題、一般への資料の公開など)、それが必ずしも好意的ではなかったことが分かる。興味深かったのがセンター設置の際の文部省 (現、文部科学省) への要求である。人員は総員60名 (うち教員17名)、建物面積延べ3000㎡という著者の湯崎稔の言葉を借りると「思い切った要求」であり、こういったことから原爆の実相解明に向けた意気込みが伝わってくる。また、将来の課題として「広島・長崎の原爆被災は、単なる戦争災害の謂ではなく、今日の核的状況からも、人類の未来にかかわる問題として受け止められ、原爆の人間社会にもたらす影響の総合的な実態解明が強く求められている。しかしそれを果し、明示し得るのはわが国だけであり、同世代にあるわれわれに課せられた課題である。そしてそれはまた広島大学に与えられた課題でもある」(p.312) という湯崎の言葉が印象深い。

以上、簡単に内容を紹介したが、本書には被爆後すぐ (1945年9月) の調査結果などがあり資料としても貴重である。一方で注文をつけたい箇所もある。まずは、章や節によって分量に差があること。医学関連の章に、線量測定 (物理) や組織の設立の経緯があったり、白血病や放射線の影響など重複している部分も

あり、まとまりにかけると。元来は、内部者向けの回顧録のような位置づけなので仕方がないのかもしれないが、整理した方がより読みやすかった。例えば、臨床編と基礎編に分けるなどする工夫が考えられる。また、復刻版ではあるが、旧単位（例えば、「レム」や「ラド」）が使われている。市販した以上、現在使われている単位（「ベクレル」や「シーベルト」）への換算表は必要だったのではないだろうか。

ただし、これらの点は本書の価値を下げるようなものではない。本書での指摘などは現在にも通じる点も多く重要である。例えば、調査の過程で収集された資料が「原爆資料館」で展示されている（いた）話は興味深かった。調査結果を分かりやすい形で示すことが、放射線という見えないものに対する市民の不安を取り除くために重要だと考えるからである。評者が勤務する原医研附属被ばく資料調査解析部には、本書でも取り上げられている貴重な被爆関連資料を保管している。放射線災害への関心が高まっていることもあり、「一般への公開」などの声に答えていかなければならないだろう。もちろん、先述したように被爆者のプラ

イバシーなどについては十分に配慮する必要がある。

また、「将来の人類社会における原子力平和利用、大規模災害対策あるいは総合医学的研究などを志向する観点からも、この集団（＝被爆者、評者注）に対する諸領域からの学術的アプローチは国際的にも関心が払われ、その成果がまたれているのである」（p.245）という文章も印象深かった。原爆症は、被爆後早い時期に発症するものもあれば、時間が経ってから発症するものもあるとされている。いまだに分かっていないことも多い。東京電力福島第一原子力発電所事故以降、広島・長崎の蓄積の見直しが求められているのはそのためであろう。

福島事故は2012年8月末現在いまだ終息を迎えていない。今後、復興という大きな課題も残されている。放射線災害を繰り返さないために、そして復興に向けて、私たちは歴史に学び、大きな課題に向き合っていかなければならない。本書はその手助けをしてくれる一冊である。

（2012年8月31日受付）

（2012年11月22日受理）